

第七章 事務機械・文具・洋品の商況

一 事務機械

経済の組織及び規模の革新、大型化とその運営のスピード化は、当然に事務用機械の綜合化を促さないではいかなかった。昭和三十一年以後のそうした変化に伴い、当社における事務機械、特に計算機やタイプライターは、時と共にその影響を受けなければならなかった。当社に於ても昭和三十四年に電子計算機の輸入が実現し、事務機械の新しい商品となった。けれども、昭和三十一年、二年では、各種各様のタイプライターやモノロー計算機などはなお主要な取扱商品であった。

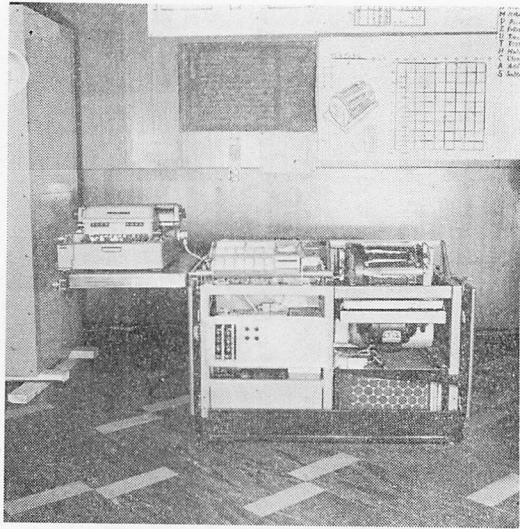
この期間に、タイプライターは従来の機種のほか、新たに三三吋型（一八万円）が、また携帯用の Administer (五万五千円)、スタンダードとポータブルとの中間機)、Royalite (三万三千元、小型ポータブル 学生向) が、昭和三十三年に入荷、翌年には同じく携帯用の Diana (四万九千元) が入荷した。しかしタイプライターも計算機も、国内における製造業を保護する立場から輸入割当制が続いていたために、電動タイプライターや携帯タイプライターの需要の増加に対して顧客の希望に応じ切れないこともあった。もっとも昭和三十二年、三十三年頃は市場にコピーイングマシンが出廻り出したためと、いわゆる鍋底景気といわれた不況のために、販売台数の伸び悩み

もあった。また従来の傾向としては、官庁・学校関係の買上げが多かったが、昭和三十二年以降は、外勤社員が直接に、民間各企業・家庭等を訪問して販売する量が増加した。各企業でもタイプライターを更新する時期にもなっていたので、新機種の電動タイプライターへの需要が高まり、一方、一般家庭・学生の間では、タイプライターを必要とする人が増えたため、注文が増しローヤル社からの供給が間に合わない程であった。

最早この時代には計算機は電子計算機が主力商品となり、機械が益々綜合化する状況にあり、従って機械組織・使用技術は近代化しつつあった。そこで当社は、機械部の中西昌太郎（当時同部販売課販売係長）を米国に派遣して、そのソフト及びハードウェアの講習を受けさせることにした。中西は、ローヤル・タイプライター社の招聘で、事務機械の現況視察のため渡米する永井弥惣兵衛機械部長に随行して、昭和三十三年五月十八日に出発した。アメリカ滞在中ローヤル社では、ローヤル電動タイプライター、LGP-30 電子計算機、マクベーンシステムの講習を、モンロー社ではプレジデント会計機システムの講習を受けた。電子計算機の講習は早稲田大学理工学部、東京光学機械株式会社から LGP-30 電子計算機の引合があったためで、その交渉の任をも持っていた。それらの諸事を果して中西が帰朝したのはその年の十月であった。

そうしたなかでモンロー計算機の販売台数は増加したが、それは大企業における事務機械化の補助機としてモンロー計算機の需要が伸張したためと、比較的事務合理化の遅れていた中小企業を対象に積極的に販売活動を行ったことによるものであった。

昭和三十四年モンロー社のモンロー会計機プレジデント B2 (五五万円) の取扱いを始めた。このため同年七



LGP-30 電子計算機

企業を対象に販売した。

当社が電子計算機の取扱いを開始したことは前述したが、輸入実現までにはいろいろの問題があった。

昭和三十二年、ローヤル・マクビー・インターナショナル社が、小型電子計算機 LGP-30 を開発、年間約一〇〇台を販売したという報告をうけ、当社としてもモノロー計算機に代る新商品として、電子計算機の輸入販売を考慮していたが、恰もその頃、早稲田大学理工学部と東京光学機械株式会社から LGP-30 電子計算機の引合があり、

月、二週間にわたって、本社に於てプレジデント会計機、加算機のサービストレーニングを行った。指導者はローヤル社 Mr. Rood 参加者は本社六名、支店五名、計十一名であった。

この他に昭和三十二年、当社では、液体輪転謄写機シンプロコピーを発売した。考案・設計等技術的な指導を事務機械部で行ない、製造は名古屋の富士工機株式会社が担当、製品は当社が買取って本支店及び代理店を通して販売した。このシンプロコピーは手軽な操作で奇麗な印刷が簡単にできるインクのいらぬリキッド式液体謄写機で、一台一五、〇〇〇円という廉価なこと、操作が簡単であるという点から、中小

既述の中西係長渡米に際して、ローヤル社と直接交渉を行い内諾を得た。しかし当時米国に於ては、電子計算機は輸出禁止品目であり、日本に於ても国産品育成保護の方針から輸入に際しては厳しい制限を加えていた。しかし種々努力の結果、早稲田大学と東京光学機械株式会社へ、昭和三十四年各一台の輸入が許可せられ、昭和三十五年に千代田光学株式会社、清水建設株式会社に各一台計四台を販売することができた。

二 文具・事務用品

(一) 耐久性事務用品

好景気に伴ってビル新築の急増、事務効率改善の気運の上昇に伴ない、事務室空間利用の合理化、各種書類・資料の整理やその保存上の安全性等事務効率の合理化向上の一環として、スチール製品の需要は急激に高まった。

当社に於ても図書館用の積層式スチール書架工事の一式請負、あるいは新築ビル内装用のスチール家具類（机・椅子・書庫・書架・ロッカー等）の一括注文を受ける機会が多くなったので、その態勢作りに努力し、スチール製事務用家具・什器・備品類及びスチール製書架等を製造している傍系会社の佐藤金庫鋼鉄工業所の設備を昭和三十四年～三十六年に拡大・新改築する等の処置をとった。

一方、昭和三十三年三月、「丸善ライブラリー・ニュース」を創刊して図書館設備・運営等全般についての関係者の知識交換の一助とし、他面、必要器具に対する図書館界の要望をうかがい、用具提供者としての当社の責任遂行に万全を期した。

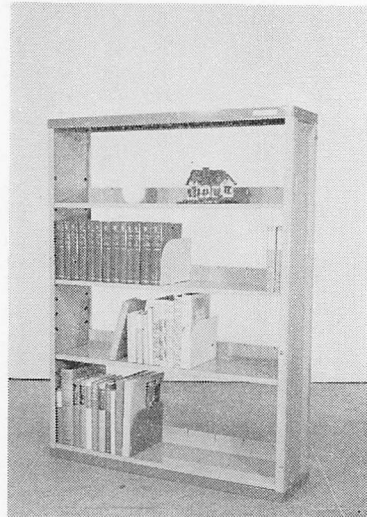
発売の図書館用品の特質や機能を広く報ずる目的を持っているが、同時にそれに劣らず各種事業所、研究室、図書館、大学、高等学校、中学校、小学校及び幼稚園等の図書館・図書室の設備・組織・機能等について、現場関係の専門家から寄稿を得て、究極的にはわがくに図書館界の実状と問題点を浮き彫りにしている。

勿論、図書館界には日本図書館協会の「図書館雑誌」その他の専門雑誌があって、高度の研究成果を挙げているが、この「丸善ライブラリー・ニュース」も、上記した意味では、不可欠の機関誌となると、当社として自負してみたい。



「丸善ライブラリー・ニュース」

この「丸善ライブラリー・ニュース」は、現在第一〇〇号に達している。いうまでもなく当社製作・



アテナ・ホームシェルフ

このほかに、後に傍系会社となった第一鋼鉄工業所で製造した家庭用書架アテナ・ホームシユェルフは発売と同時に大変好評で、現在も引き続き好調な売れ行きを保っている。

(二) その他の事務用品

他のメーカーでも同様であったが、アテナ万年筆製造に要する資材の入手にはこの頃はまだ隘路があった。ペン先の金の入手が容易でなく、青戸工場では、耐酸ペン付万年筆も製造していたが、昭和三十五年には、大部分を14K金ペン付万年筆にすることができた。

舶来品のウォターマン、パークー、シユーフアー、オノト、モンブラン、ペリカンなどの万年筆も入荷していたが、価格の点でまだ一般向ではなかった。

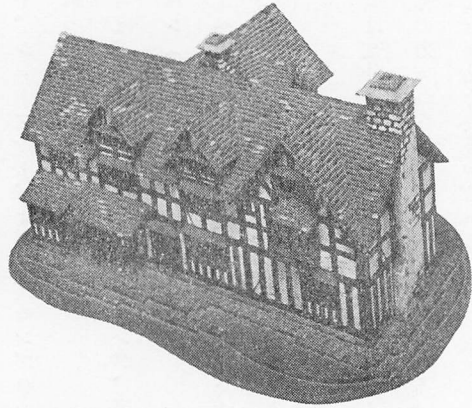
戦後、とくに昭和三十一年頃からは、筆記具としてのボールペンが、可成りの人気を呼んでおり、当社でも、昭和三十三年初めに、アテナボールペン（一八〇円）を売り出した。

好評のワンダーインキ（ワンダーペン）は、それぞれの用途に応じた太さ・色の開発が進み、その種類は豊富になり、広く使用されている。（ワンダーペンの名称は、当社固有の名称で、業界ではこれらのペンをマーキングペンと総称している。）

紙製品では、特に当社の原稿用紙は十分に吟味され、ペンのすべり、インキののり、紙の色等を考えて特別に漉いた良質紙を使用しているため多くの方々から御愛用をいただいている。各種のノート類は、自社製・他社製ともに特に用紙及び綴りには充分注意した製品を取扱っている。



アテナエースインキ



オルゴール (シェイクスピアの生家)

図書館用カードは、耐久性を必要とするため、凡て当社で紙質を指定し特漉をしているので好評を得ているが、とくに昭和三十五年から売り出した文献用カードは各方面の評判がよい。

インキについていうと、昭和三十四年に従来のアテナインキのイメーヂチェンジを図って、それまでの瓶の型、函のデザインを新たにした

「アテナエースインキ」を発売した。

事務用品、文具品とはいささか異なるが、戦後文具売場では、守屋三郎製作のオルゴール、レターラック等の手工芸品を販売、好評であった。

このオルゴールの製作者守屋三郎は、販売を当社だけに限り、洋書を参考にして実物を忠実に模倣したものを作り、縮尺が正確であることから、高い評価をうけ、文具売場が誇る商品の一つであった。

三 洋品・雑貨

昭和三十一年から五年間における洋品部門の商況を一括的に記することは難かしいが、一般の景況から徐々にもどのように、向上しつつあった。

当社の扱う洋品の中心を占めるものは、紳士用レインコート（マルゼンコート、バーバリコート）、既製服（ブレザー、替ズボン）、紳士用肌着、ポロシャツ、ゴルフ用品などである。特に当社製のレインコートは、現在に至るまで、仕立の堅牢な点、防水力の抜群な点で、お客様から非常な好評を得ている。

後に述べるように、ゴルフを楽しむ人の増加で、紳士の服装の流行はスポーティに変わって来たため、ポロシャツ、ジャンパーといった紳士用品が堅苦しい英国風のスタイルからラフなアメリカ好みに変ってきた。その一例として裏にボアをチャックで付けたデタッチ・ジャンパー、夏用のタツサー地のシャツ・ジャケットは大好評で飛ぶように売れた。

中年以上の男子にとって中折帽子は、まだ帽子類の中心にあったと記憶するが、ステットソン社との技術提携品が一個、二、五〇〇円から五、〇〇〇円、輸入品ではスコットが九、五〇〇円、クリステイが七、五〇〇円、ポルサリノが一、〇〇〇円が中心値であったし、国産の鼠色、茶色のものは一、五〇〇円と二、〇〇〇円ぐらいであった。

毛布ではカシミア織の毛布（花模様・雷紋模様）一枚三五、〇〇〇円 五〇、〇〇〇円 七〇、〇〇〇円 一〇〇

〇、〇〇〇円といった高級品を陳列することができた。国内製品の駱駝色花模様特選毛布は一枚三、〇〇〇円位であった。

雑貨では、戦前からのマルゼンペーラム、ペーラムポマード、ベートニック、ペーラムチック等の男性用頭変化粧品を店頭に陳列、御愛用をいただいた。昭和三十四、五年になると、フランスからルシアン・ルロン、ジャン・パトウ、ミロ、シャネル、コテイといった香水が続々と輸入された。

昭和三十年代に入ると、ゴルフが定着する傾向をみせはじめ、外国製のゴルフクラブの売行も伸びた。そこで昭和三十二年七月に当社から“New Model Maruzen 571” ゴルフクラブ（ウッド三、五〇〇円 アイアン三、二〇〇円）を新発売した。昭和三十三年には“Maruzen 572” ゴルフボール（一打二、四〇〇円）を発売した。

昭和三十一年—三十五年における中元・歳暮贈答品

この頃の贈答品は値段の上からは五〇〇円から二、〇〇〇円程度の品が中心であった。

前章で述べたように値段が手ごろということもあって特織シート、靴下セット、毛メリヤスシャツ、ラクダシャツ、お仕立券付ワイシャツ生地（英国製生地）、毛布（当社オリジナル純毛布三千円）等が、相変らず好評を得た。その他ではこの頃になると、舶来のキュティキュラ薬用石鹸（三〇〇円）、ジレット安全剃刀セット（三〇〇円）、丸善化工製のオーデコロンセット、ベートニックセット（五〇〇円）が進物用に喜ばれた。丸善化工製の化粧品は、たいそう評判が良く、外国人にはペーラムが特に愛用せられた。特選夏毛布（千円）Maruzen 572 フェンボール（一ダース入三千円）、英国製ひざ掛（三千円—一万円）、英国製モーレー肌着（五千円）、また日本人の



ペーラムおよび化粧品類

間にベットを使用する人が増えたこともあってベット用毛布（五千円）、純毛二枚続き毛布（二万円）等もよく売れた。

一方好景気によって進物品も高級化する傾向があった。ガウン、スモーキングジャケット、ビキユナ・カーディガン、ラクダ毛布二枚続き、Maruzen 572 ゴルフクラブセットといった一万円以上の品物が売れ出したのもこの頃からであった。